

だいき そう
大力の僧

むかし じつじんそうず そう そうず ぶっきょう し
昔、実因僧都という僧がありました。僧都は仏教のことは知らないことがないほど

ちしき そう うえ ちから つよ ゆうめい
知識のある僧でした。その上、ものすごく力が強いことでも有名でした。

そうず ひるね で し そうず ちから ため
僧都が昼寝をしているとき、弟子たちが僧都の力を試してみようといたずらをしまし

そうず あし ゆび ゆび あいだ くるみ やつ そうず め さ
た。僧都の足の指と指の間に、胡桃を八つはさんでおいたのです。僧都が目覚まして

ひと おお の くるみ いちど くだ ち そうず
一つ大きく伸びをすると、胡桃は一度に砕け散ってしまったそうです。この僧都が、ある

とき てんのう ごてん よ かえ おそ もん そと で つき で
時、天皇の御殿に呼ばれて帰りが遅くなってしまいました。門から外に出ると、月が出

あか て とお ねこ こ いっぴきある
てあたりを明るく照らしていましたが、通りにはもう猫の子一匹歩いていませんでした。

おとこ ひとりちか そう こえ
ところが、しばらくするとどこからか男が一人近づいてきて、僧に声をかけました。「ど

とも てら
うしてお供がいらないのですか。わたしがあなたのお寺までおぶって行ってあげましょう。」

おとこ しんせつ い そうず れい い きがる あいて せなか
と男は親切に言いました。僧都はお礼を言って気軽に相手の背中におぶさりました。

おとこ そうず ある みち りょうがわ き しげ くら
男は僧都をおぶってしばらく歩きました。そして道の両側に木が茂って暗くなって

ところ く おとこ い そうず
いる所に来ると、男は「おぶうのはここまでだ。」と言いました。僧都が「ここはわた

てら い おとこ らんぼう からだ ゆ いのち お
しの寺ではありませんよ。」と言うと、男は乱暴に体を揺すって、「命が惜しかった

はや せなか お き ぬ おど そうず おどろ
ら、早く背中から下りて、着ているものを脱げ。」と脅しました。僧都は「ああ、驚いた。

しんせつ ひと おも さむ よる きもの
親切な人がいると思っていたら、そうではなかったのですね。でも、こんな寒い夜に着物

か ぜ い りょうあし おとこ
がなくなったら、風邪をひいてしまいます。」と言いながら、おぶさっている両足で男

こし し
の腰をぐいと締めつけました。

こし ほね お し おとこ いた いた ゆる
腰の骨が折れそうなほど締めつけるので、男は「痛い。痛い。許してください。あな
てら
たのお寺までおぶっていきますから、どうか足の力を抜いてください。もう死にそう
さけ おとこ ことば き そうず あし ちから すこ め
す。」と叫びました。男のあわれな言葉を聞いて、僧都は足の力を少し抜いて、「それ
てら かえ まえ つきみ つき ばん
では、寺へ帰る前に月見をしていきましょう。月がきれいな晩だからちょうどいいで
い とお かわぎし い めい
しょう。」と言って、遠くの川岸まで行くように命じました。

おとこ しかた かわぎし そうず つ わたし
男は仕方なく、川岸まで僧都をおぶっていき、「着きましたよ。それでは、私はこれ
しつれい い かえ そうず つきみ お
で失礼します。」と言って、帰ろうとしました。しかし、僧都は「お月見はまだ終わっ
まえ あし ちから い おとこ いた
ていないのだから。」と、前よりいっそう足に力を入れました。男は痛がってうめきまし
そうず なが あいだおとこ せなか うつく つき なが うた し ぎん
た。僧都は長い間男の背中から美しい月を眺めて歌をよみ、詩を吟じました。それ
お そうず つぎ つきみ ばしょ い めい おとこ ゆる
が終わると、僧都は次の月見の場所へ行くように命じました。男が「もう許してくださ
い そうず あし ちから い ひとばんじゅう おとこ そうず
い。」と言うと、僧都が足に力を入れます。こうして一晩中、男は僧都をおぶったま
ある よ あ そうず てら い い
まあちこち歩かされました。そして夜が明けるころ、やっと僧都のお寺まで行くように言
われたということです。